

「スポーツの都市化」が近代スポーツに与える インパクトとは？

：アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」の
文化社会学的考察¹⁾

What is the Impact of the “Urbanization of Sports” on Modern Sports?
: Consideration of “Baseball 5” as the Baseball-type Game of Urban Sports
from Perspective of Cultural Sociology

三谷 舜*

はじめに

国際オリンピック委員会（International Olympic Committee、以下 IOC）は 2017 年 9 月 13 日にペルー・リマで開催された第 131 次総会で、2020 年の東京に続くオリンピック開催都市について「異例の決定」を行った。そこでは、2024 年にフランス・パリで、2028 年にアメリカ・ロサンゼルスで開催することを同時に決定した²⁾。このことは、オリンピックの開催立候補都市が減少することを危惧した決定であることが見え隠れする³⁾。

オリンピックは独自の競技種目を持っているわけではなく、様々な競技種目の集合体として世界最大規模のスポーツイベントである。今日、オリンピックは大会ごとに開催する競技種目を追加し、また排除するといった「入れ替え」を頻繁に行っている。IOC の総会で追加／排除する競技種目を選定する時期が近づくにつれ、それぞれの国際競技団体（International Federation、以下 IF）による、開催国オリンピック組織委員会（Organizing Committee for the Olympic Games、以下 OCOG）へのロビー活動が活発とな

* 立命館大学社会学研究科博士後期課程

る。そのロビー活動は、IFより競技プランが示されるが、そのほとんどが主にIOCの展望に沿う形となっている。そのみならず、その競技の開催国における「人気」や「知名度」、「伝統」なども宣伝の対象となっている。さらに、オリンピックは、開催都市に恒久的な施設ではなく、開催されたという記憶を無形のレガシーとして残すことと若年層の取り込みを「アーバンスポーツ (urban sports)」に期待している。そこで、「近代スポーツ」とは異なるサーフィンやボルダリングなどの「新しいスポーツ」を、アーバンスポーツとして位置付けた。そして、開催地を途切れさせないこと、若年層を取り込むことで人気を維持することなどにより「持続可能なオリンピック」を目指すために、競技の入れ替えが行われている。

では、それぞれのスポーツ競技、種目はIOCやOCOGの展望に沿うことができない場合、「入れ替え」に手放しで応じるしかないのだろうか。2008年のオリンピック北京大会以降の大会で「排除」されていたが、2021年に延期された2020オリンピック東京大会（以下2020東京大会⁴⁾）での「復活」が決定している野球・ソフトボールは、「復活」を目指すために様々な施策を行ってきた。その代表的なものは、世界野球ソフトボール連盟(World Baseball Softball Committee、以下WBSC)の創設である。これは、オリンピックから「排除」されたことを受け、野球とソフトボールの国際競技連盟を1つに統合して一体となってオリンピックへの「復活」を目指すために作られた組織である。

このWBSCは、2024パリ大会での野球・ソフトボールの「排除」の趨勢に対応するために、ベースボール型競技の新たなものを作り出した。それが、「Baseball 5 (ベースボールファイブ)」である。この「Baseball 5」とは何かを読み解くためには、IOCが提唱する「スポーツの都市化」と「アーバンスポーツ」が鍵となる。そして、従来の野球・ソフトボールとの差異から、何をベースボール型競技の本質であると重視したのかということが論点となる。

このアーバンスポーツについての先行研究には、以下のようなものがある。貝島桃代（2000）による、アーバンスポーツを都市空間と人の関わりとしてとらえ、東京の都市としての独自性とスポーツの関係の可能性に着目したもの。豊島誠也と田里千代（2019）による、本来ビーチで行われるサーフィンから人工波で行う都市空間に展開するサーフィン場が作られていることを例にとって、都市空間が生み出したアーバンスポーツの可能性としてスポーツの変容を見据えたもの。そして、市井吉興のアーバンスポーツのスポーツツーリズムの資源としての可能性について論じたもの（市井、2020b）、2020年東京オリンピックにおけるアーバンスポーツを新たな競技種目選定の仕組みとの関わりで論じたもの（市井、2019）、2020東京大会の開催から延期が決定する「政治」とアーバンスポーツとして選ばれたライフスタイルスポーツの「エートス」との関係性を論じたものがある（市井、2020a）。

そこで本稿は、アーバンスポーツ化されたベースボール型競技「Baseball 5」に着目して、オリンピックにおける競技の入れ替えの力学と駆け引きとそこでの競技種目の変容と正当性を明らかにすることを目的とする。

まず、オリンピックにおける競技種目の「入れ替え」が何を根拠にどのように行われるのかを確認する。ここでは、IOCが唱える「スポーツの都市化（urbanization of sport）」や「アーバンスポーツ」がどのようなことを指し、状況がどう変化しているのかが浮き彫りとなる。ここでは、野球・ソフトボールを巡って2020東京大会でどのような経緯を辿ったのかを例に整理する。

次に、「Baseball 5」をWBSCが作るに至った経緯を確認する。そして、「Baseball 5」の公式ルールブックや公式プレー動画を元に、従来の野球・ソフトボールから変更された点、残された点を明らかにする。この作業では「アーバンスポーツ化されたベースボール型競技」として「Baseball 5」が、何を野球・ソフトボールの本質として強調し、何を削ぎ落としているのかを明らかにする。このことは、「正当」なベースボール型競技が持つ要素と、普

及のために障壁となる要素の違いを読み解くことにつながる。

最後に、ノルベルト・エリアス (Norbert Elias) が示した「興奮の探求 (quest for excitement)」の概念を用いて、スポーツにおける興奮を整理する。そして、アーバンスポーツにおける「興奮の探求」とは何か、「Baseball 5」における「興奮の探求」がどのように担保されているのか、従来の野球・ソフトボールにおける「興奮の探求」と何が異なるのかを明らかにする。

第1章 スポーツの都市化とアーバンスポーツの登場：持続可能なオリンピックムーブメントに向けた競技の入れ替えの正当化

2020年3月24日、IOCは、新型コロナウイルス感染症の世界的流行を受け、2020年に予定されていたオリンピック東京大会の延期を決定した。6日後の3月30日、IOCは延期後の日程として1年後の2021年7月23日に開会式を行い、延期前の日程を引き継いで実施することを発表した⁵⁾。新型コロナウイルス感染症による延期を余儀なくされた2020東京大会は、オリンピックの歴史において、非常に画期的な大会となることが期待されていた。なぜなら、IOCが2020東京大会への新競技・種目の追加とその根拠となる「スポーツの都市化」を2016年のブラジル、リオ・デ・ジャネイロで行われた129次総会において提起したことがきっかけになっている。

この「スポーツの都市化」であるが、この方針は野球・ソフトボール、空手とともに2020東京大会で公式競技となった、サーフィン、BMX、バスケットボール3on3、スケートボード、スポーツクライミングという新しい競技・種目を採用するための正当性を、「オリンピックムーブメントの持続可能性を志向した方針」という意味において担保するものである。IOCが2018年10月5日、6日に行ったフォーラム「Olympism in Action」において「URBANISATION OF SPORTS」というワークショップが開催された。そこでは、スポーツの都市化とアーバンスポーツについて次のような概要のセッ

ションが行われた。

世界の人口が都市に集中するにつれ、物理的に利用可能なスペースや施設を求める競争が激化している。このことは、スポーツへの参加における新しいトレンド、およびテクノロジー、ファッション、音楽、芸術、大衆文化の交点における革新と相まって、新しいスポーツの台頭と既存のスポーツの進化をもたらすことで、スポーツや身体活動にアクセスできる人のための機会を広げる。このワークショップでは、新しいスポーツのトレンドと革新、およびいくつかの主流なスポーツが都市空間にどのように適応しているか、そして新しいスポーツのよって若い人たちをオリンピックムーブメントに引き付ける方法を探る⁶⁾。

ここに示されているように、IOC は、スポーツを都市化すること、つまりアーバンスポーツによって、若者をオリンピックとその理念であるオリンピックムーブメントに引きつけることを狙いとしていることがわかる。また、スポーツと他の文化の交わりにより、これまでスポーツにコミットしてこなかった人々の参与も期待されている。

市井（2019）は、エクストリームスポーツ国際フェスティバル（Festival International du Sport Extreme : FISE）に着目し、アーバンスポーツの定義について議論を行った。そこでは、「アーバンスポーツとはライフスタイルスポーツのなかでも普段から都市部で実施されているスポーツであることと、都市部でも会場設営の仕方によっては実演可能なスポーツ」であるとしている。

ここで注目してみたいことは、「アーバンスポーツ」が登場する経緯である。IOC の 129 次総会後のプレスリリースをそのまま読み取ると、若者を積極的にオリンピックへと取り込む狙いがあると読み取れるが、スポーツの都市化には他にも政治的な意味がある。それは、「スポーツ施設の恒久化を前

提とすることなく、スポーツを都市（再）開発の資源として活用し、都市に付加価値を与えること」という意味と「エンターテインメント性の高いアーバンスポーツの競技会が行われたという記憶」としての「無形のレガシー」を残すという意味があると指摘する（市井、2019）。

さらに、IOC のワークショップで説明されるアーバンスポーツのねらいと、市井（2019）による議論を整理すると、アーバンスポーツは、①都市化されたスポーツの中でも、普段から都市部で実施されているライフスタイルスポーツや、会場設営を工夫することで実演可能であるという形態、②若者をオリンピックとオリンピックムーブメントに引きつけるとする狙いに加え、③恒久的でないスポーツ施設の設置を通じて、スポーツを都市開発の資源とするという意味がある。

これらのことからアーバンスポーツには、金銭的にも時間的にも負担の大きいこれまでのような都市計画や、メッセージを伴った国威発揚のような伝統を持つオリンピックを少しずつ転換させ、持続可能な大会としての性質を帯びさせることが期待されていることが読み取れる。この点は、先にも述べたように、サーフィン、BMX、バスケットボール 3 on 3、スケートボード、スポーツクライミングという新しい競技・種目を採用するための正当性を担保するものとなっている。「スポーツの都市化」のもと、新たなスポーツ競技・種目をめぐるこのような状況がある一方で、2019 年 2 月 21 日、2024 パリ大会の OCOG は、2024 パリ大会において野球・ソフトボールを「除外」することを決定した。ここには、様々な要素が絡んでいるが、主たるものを紐解いてみたい。

1 つは、「Olympic Agenda 2020（以下アジェンダ 2020）」の存在である。「アジェンダ 2020」とは、2014 年 12 月の IOC 総会にて可決された、将来のオリンピックに対する中・長期的な計画である。ここでは、40 の提言が記されている。その中の 10 番目の提言「競技ベースから種目ベースのプログラムへの移行」に、「開催都市の組織委員会は当該オリンピック競技大会の開

催プログラムに、1つまたは複数の種目を追加すると提案することを IOC は容認する⁷⁾」という文言がある。これを根拠に、2020 東京大会では空手、野球・ソフトボールが OCOG 主導のもとに追加された。それと同じように、2024 パリ大会の OCOG による野球・ソフトボールを「除外」する決定はアジェンダ 2020 を根拠として行われたのである。

2つには、野球・ソフトボールが欧州・アフリカにおいて「マイナー」な競技であるとイメージされていることが挙げられる。それは、主に競技人口の少なさに起因すると考えられる。一見すると、ヨーロッパではメジャースポーツとは言い難い野球・ソフトボールが除外されることに、それほど違和感を抱く必要はないのかもしれない。

しかし、これまで述べてきた「スポーツの都市化」、「アーバンスポーツ」という視点をふまえ検討すると、2024 パリ大会における野球・ソフトボールの「除外」は、別の解釈が成立すると思われる。それでは、次章において、「Baseball 5」を取り上げ、スポーツの都市化が従来のスポーツ、つまり、近代スポーツに与える影響について考察を試みたい。

第2章 Baseball 5 とは何か？：ベースボール型競技のアーバンスポーツ化

前節でも述べたように、パリ大会から野球・ソフトボールが「除外」されたのは、欧州・アフリカにおいて、これらが「ポピュラー」な競技とは捉えられていないことが挙げられる。なかでも、競技人口の少なさが主な要因と考えられている。その対策として、WBSC は欧州・アフリカへの野球・ソフトボールの普及に力を注いできた。

WBSC は、2019 年 11 月 21 日に開催された WBSC コンgressにおいて、「開発委員会によるレポート（DEVELOPMENT COMMISSION REPORT 2018/2019）⁸⁾」を発表した。これは、WBSC が加盟国の要請に基づいて行っ

た1年間の様々な普及活動の概要をまとめたものである。開発活動は、各国への直接支援に予算の50%を使っている。それ以外に、選手や指導者にスキルを教えるためのクリニック、ユース世代の育成、スポーツ施設の拡充、代表チームのサポートなどに予算の30%を使用していると報告されている。これらの支援は要請を受けて行うものであるが、ヨーロッパが39件、アフリカが20件と、アメリカ大陸の10件、アジアの12件、オセアニアの9件と比較して要請の数が群をぬいている。要請をするということは、WBSCによる支援のもとに開発が必要であると各連盟が判断しているという背景がある⁹⁾。

このような取り組みのなかで、WBSCは、2018年に欧州やアフリカ諸国の野球・ソフトボール競技人口の低下に歯止めをかけるために、「Baseball 5」という新たな競技を発表した。そのさい、WBSC会長のリカルド・フラッカリ(Riccardo Fraccari)は、その「Baseball 5」を次のように紹介した。

Baseball 5は5人制、5イニングからなる野球・ソフトボールの簡単で新しいストリート競技である。手軽に街中で楽しめるこの競技が広がれば、これまで開拓できなかった地域や場所にも野球とソフトボールを広めることができるだろう¹⁰⁾。

この競技は、キューバでストリートベースボール(street baseball)を行う若者の動画¹¹⁾をヒントに、フランス野球ソフトボール連盟会長のディディエ・セミネ(Didier Seminet)が野球の普及方法として発案したことがきっかけとなっている。セミネはWBSCに働きかけてルールを整備した。そして、フランス国内で普及活動を始めたところ、競技人口は3年間で約2000人になった。Baseball 5に取り組む草野球チームも増えているという¹²⁾。

Baseball 5公式ルールブックの冒頭「introduction」には、以下のように特徴が説明されている。

Baseball 5 は、伝統的な野球やソフトボールのアーバン型である。若年層を対象とした、スピーディでダイナミックなスポーツであり、基本的なルールは野球やソフトボールと同じである。Baseball 5 は、ゴムボール (rubber ball) さえあれば、どこでも誰でもプレイすることができる¹³⁾。

このように紹介される特徴から、Baseball 5 は野球やソフトボールを再設計し、アーバンスポーツ化したものとみなせよう。

まず、ここで整理しておくべき点として、「伝統的な野球やソフトボール」からどのような点を変更しアーバンスポーツとして仕上げられたのかということが挙げられる。そこで、Baseball 5 の公式ルールより環境や用具の側面と、試合運営に関する側面を整理する。

環境や用具の側面については、第一に、フィールドサイズが大きく縮小されていることが特徴である。1 辺が 21m の正方形があれば競技場が作れるようになっており、そのうち内野が 1 辺 13m の正方形である。野球よりコンパクトな場所で行われるソフトボールの内野の 1 辺が 18.29m であることと比較しても、とても小さい面積のフィールドでプレイされることがわかる。

フィールドの面では、他にも工夫が加えられている。それは、競技場を区切るフェンスに行われている。野球やソフトボールでは、成人の身長より高いフェンスに囲まれた「球場」でプレイする。対して、Baseball 5 では、100cm 程度のフェンスで四方を囲むのみとなっている。この低いフェンスにより、競技場の周囲との境界が曖昧になり、都市に「溶け込む」ような効果があると考えられる。



図1 Baseball 5のフィールド（実際の様子）¹⁴⁾

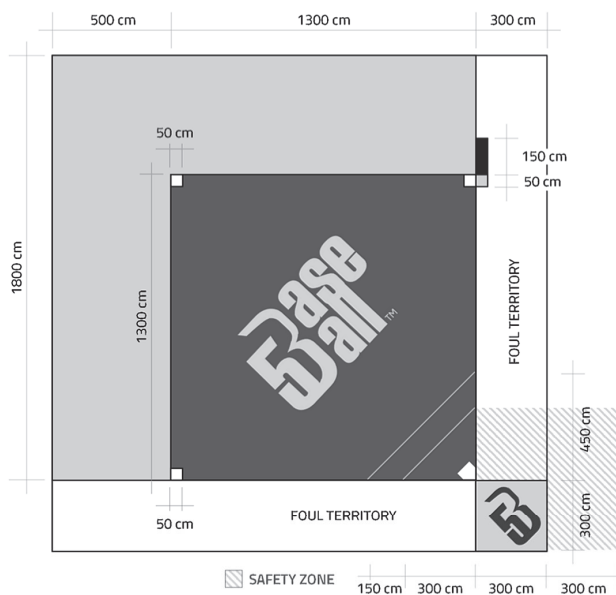


図2 Baseball 5のフィールド（設計図）¹⁵⁾

次に、用具の面で工夫が加えられている。Baseball 5 で使用される用具は、ベースとボールのみである。バットは使用されず、てのひらか拳でボールを打つ。

ベースは、内野の4隅に設置する。その際、地面に設置するものでなくとも、マークして判別がつくようにするだけでも良い。また、通常の野球やソフトボールであれば本塁の左右に設置される打者席 (Batter's Box) は、Baseball 5 では本塁の後ろ側に 300cm 四方の場所が打者に与えられ、その中で打撃動作を行う。

ボールについては、Baseball 5 の紹介文によると、「ゴムボール (rubber ball)」と呼ばれているものが使用される。この「ゴムボール (rubber ball)」は、軟式野球ボールと構造が類似している。軟式野球ボールも、ゴムの外周構造の中にガスが充填されている。WBSC が主催する大会においては、公式規格に則って製造された公式球が使用される。



図 3 Baseball 5 のプレーの様子¹⁶⁾

次に、試合の進め方に関するルールを整理する。進め方の大枠は従来のベースボール型競技と同じく、攻撃側が3つアウトを重ねると攻守交代となる。それを両チーム5回ずつ(5イニング)行い、1試合となる。1チーム8人で構成され、フィールドには5名が立ち、3名は控え選手となる。投手と捕手は置かずに、フィールド内のどこでも好きな位置を守ることができる。

攻撃は5人の出場選手が順次打撃を行うことで進んでいく。打撃は打者席内で行う。打者は手に持っているボールをてのひらか拳で強く打ち、本塁から3m以上離れた位置で打球をワンバウンドさせる必要がある。この点で、従来のベースボール型競技はバットを使って遠くに強い打球を放つことを攻撃側は目指すが、Baseball 5では、バットを使わずに、「手打ち」でフィールド内におさまるようにワンバウンドの強い打球を放つことをルールで規定している。つまり、コンパクトなフィールド内でプレーを完結させられるように、ルールで打球の種類を限定したのだ。

守備は、①打者より早くベースを踏む、②打球がバウンドする前に捕球する、③次の塁を目指している走者にボールを持ってタッチする、この3つがアウトを取るための主な動作になる。このプレーは、従来のベースボール型競技でもアウトをとるための代表的なプレーとなっている。その他、打者がアウトになるケースは、ファウルゾーンに打球を打ってしまった場合、打球がフェアゾーンにバウンドせずにフェンスに当たったり超えたりした場合、が特徴的なケースである。このケースは、Baseball 5に特徴的なプレーであるといえる。Baseball 5では投手を置かないため、打者が狙いを定めて打球を放つことが容易になる。それに対してファウルゾーンに打球を放つとアウトになるというルールは、トライできる回数に制限をかける意味がある。また、打球がフェアゾーンにバウンドせずにフェンスに当たったり超えたりするとアウトになるということは、アーバンスポーツとしてコンパクトに設計されたBaseball 5の特性として、打球を中に留めることでプレーをフィールド内に収める効果がある。

ここまで見たように、Baseball 5 はアーバンスポーツとしての条件を満たすために、従来の野球・ソフトボールのルールを改変することでプレーや動きを制限している。そして、バットを使用せずに、ボールも柔らかいもの (rubber ball) に変更して競技を行っている。

しかも、この競技は、2026 年にダカールで開催されるユースオリンピック (以下 2026 ダカールユース大会) に新種目として採用されることが、2020 年 1 月 8 日にスイス・ローザンヌで行われた IOC の常任理事会で決定された¹⁷⁾。Baseball 5 がユースオリンピックの新種目として採用されたことは、非常に注目すべきことである。なぜなら、IOC が提起した「スポーツの都市化」という方針のもとで採用されたスケートボード、BMX フリースタイルなどのアーバンスポーツ競技・種目は、2020 東京大会に先立つ 2018 年に開催されたブエノスアイレス・ユースオリンピック大会 (以下 2018 ブエノスアイレスユース大会) で競技会として実施されたからである。

2018 ブエノスアイレスユース大会では、今後、オリンピック大会での正式競技化が期待されるブレイクダンスの競技会が実施されていた。また、アーバンスポーツの競技会場となったアーバンスポーツパークの設計や運営は、先に紹介した FISE の運営会社であるハリケーン社が取り仕切った (市井、2020b)。まさに、2018 ブエノスアイレスユース大会は 2020 東京大会のアーバンスポーツの競技会に向けた運営上のプロト大会に位置づけられている。さらに、ユースオリンピックは、IOC が提起した「スポーツの都市化」の具体化に必要なスポーツコンテンツの選定と開発の場として位置づけられようとしている。

こういったユースオリンピックの状況の中で、WBSC は次のように表明した。「Baseball 5 は、2026 ダカールユース大会において青少年に焦点を当てたスポーツをさらに増やす絶好の機会をもたらす。この種目は、セネガルの若い人々との交流という 2026 ダカールユース大会のビジョンの重要な柱と完全に合致する。やはり、Baseball 5 が 2026 ダカールユース大会の正式種目

となったことは、アフリカの野球・ソフトボールにとって前例のない発展の機会となる。2019年にWBSCは「アフリカ開発プロジェクト(African Development project)」を立ち上げ、より多くの人々にスポーツを紹介するためのツールとしてBaseball 5を活用することを盛り込んでいる¹⁸⁾。』。

このようにBaseball 5は、「若者を引きつける」、「スポーツを都市開発の資源にする」という狙いがある。また、Baseball 5は、「都市部で開催可能なように工夫したフィールドで行う」という特性も持つ。この点については、このあとでルールと照らし合わせる形で確認する。つまり、Baseball 5を2026ダカールユース大会に選定した狙いは、アーバンスポーツそのものの持つ狙いや意味と方向を同じくしている。

この点から、Baseball 5がアーバンスポーツとして伝統的なベースボール型競技である野球やソフトボールを「再設計」した理由が見えてくる。「はじめに」でも触れたように、ベースボール型競技はヨーロッパ諸国やアフリカ諸国における競技人口の少なさが課題となっている。その解決に向けて、「開発」を大義名分として掲げながら、JICA大学連携による取り組みや、アーバンスポーツ化されたBaseball 5のユースオリンピックへの採用が進められていると言える。

次からは、バットを使用しないことや柔らかいボールを使用すると言った「スポーツ用具」が変わることとスポーツにおける「興奮」の関係について検討する。

第3章 アーバンスポーツと「興奮」：Baseball 5の用具と環境

まず、スポーツにおいて「興奮の探求」という感情の動きに着目することの意味を、概念としての「興奮の探求」について確認することで明らかにしておく。社会学者のノルベルト・エリアスは「興奮の探求」について議論するにあたって、「われわれは、人類の歴史を通じて、おそらく人生の規則性

に反目してきたと思われるような自然発生的で基本的な興奮に関心を抱いている」と述べている（エリアス・ダニング、1986=1995、p.102）。この「自然発生的で基本的な興奮」とは、スポーツやレジャー活動などの「余暇活動」によりもたらされる「楽しさ」や「喜び」、「自己表現」などのプラス方向のものばかりではない。マイナス方向の「自然発生的で基本的な興奮」とは、「怒り」や「悲しみ」、「アイデンティティの喪失」などがある。これらは、現代社会において、「家族関係」や「仕事の圧力」などの「ストレス」と呼ばれるものに起因する。

スポーツにおける「興奮の探求」はどのような機能があるのだろうか。エリアスは「重大で、陰悪な興奮を生み出す傾向が減少してきた社会では、遊戯的興奮の代償機能が增加してきた」と述べている。エリアスが『スポーツと文明化』で議論の前提としたのは、近代化される英国社会だった。その社会では、議会政治が制定され、政治が言語ゲーム化することや暴力的な行為を軍隊や警察が回収するようなことが起こっていた。そのような中で、スポーツに求められたことの1つは、遊戯的興奮が「自然発生的で基本的な興奮」を肩代わりすることだった。菊幸一は、スポーツが果たすこの機能について、「文明化に対する抵抗を集団的アイデンティティとして社会的に誇示するために、文明化されたスポーツの場をそれとは正反対な真の暴力発揮の飛び地として意図的に利用しようとする」ものであると指摘している（菊、2010、pp.222-223）。つまり、スポーツは、日常で得ることのできない興奮を発揮するという「飛び地」としての機能を持つということである。

また、スポーツなどにより得られる遊戯的な興奮の探求として、「苦労や手間を楽しむ」という機能がある。スポーツにおける「苦労や手間」とは、ルールにより制限されたパフォーマンスや用具の制限を意味する。通常、生活を送る上ではなるべく合理的に、少ない工程で最大の結果を得られるように動くことがほとんどである。しかし、スポーツにおいてはパフォーマンスを制限するために、ルールや用具により制約を加えている。

「興奮の探求」がアーバンスポーツにおいて立ち現れる際には、近代スポーツとは違った性質のものを含んでいることが指摘できる。それは、第1章で整理したアーバンスポーツの特徴からその要点を示すことができる。アーバンスポーツの特徴とは、近代スポーツとの差異という理解もできる。特に、①都市化されたスポーツの中でも、普段から都市部で実施されているライフスタイルスポーツや、会場設営を工夫することで実演可能であるという形態、③恒久的でないスポーツ施設の設置を通じて、スポーツを都市開発の資源とするという意味、の2つから見てくる。つまり、近代スポーツは会場設営を工夫しても実施が難しかったり、恒久的な施設の設置を前提としていたりすることがほとんどである。そこから、スポーツのパフォーマンスを都市に溶け込ませる感覚や、親みのある場所を普段とは違う用途として、スポーツのパフォーマンスを発揮する場所へと変えることで、明確に区切られた場所で行う近代スポーツとは異なる「興奮の探求」を実践することができると言える。

このように整理された「興奮の探求」を鍵に、Baseball 5 について議論する際に問題になるのは、Baseball 5 の特性である。つまり、従来の野球やソフトボールからの変更点である、投手を置かずに、バットも必要とせず、軟式ボールを採用するという大きな変更を施したにもかかわらず、「ベースボール型」の面白さを担保し、野球とソフトボールへとつながるような仕組みに位置付けられているということの中身が論点となる。

スポーツ用具は、「主体によって操作されない、状況的道具（環境：ハードル、ゴールなど）」と「主体によって操作される、補助的道具（用具：グローブ、スパイク、スターティングブロックなど）」と分類される（菅原、1984、pp.38-40）。Baseball 5 の用具では、状況的道具としてフィールドとベースが、補助的道具としてボールが使用される。この時点で、ベースボール型競技に特徴的な用具であるグラブとバットを使用しない。

そして、スポーツ用具を操作する技術として、①身体を道具として使用し

操作するスキルと、②外在的、客観的に存在する道具を使用し操作するスキルがあるとする。加えて、②外在的、客観的に存在する道具を使用し操作するスキルには、(a) 身体を道具として使用・操作するとともに客観的に存在するものを操作するスキルと、(b) 常時手に保持し続ける客観的に存在する道具を使用、操作するスキルの2つが内包されている（橋本、1984、pp.79-86）。Baseball 5では、走る、飛ぶなどの①身体を道具として使用し操作するスキルを土台に、主に②(a) 身体を道具として使用・操作するとともに客観的に存在するものを操作するスキルで、ボールを打ったり、捕ったり、投げたりすることになる。

このような用具や技術の議論から見ると、ゴムボールを使うこととバットではなく手で打つという Baseball 5 の特性は、表裏となったセットの規則であると捉えられる。手で打つということを実現するためには、ボールを柔らかくする必要がある。ボールを柔らかくすることによって、打球の飛距離が制限され、フィールドを狭くすることとの整合性が取れている。

そして Baseball 5 のもう一つの特徴である「投手を置かない」ことは、フィールドを狭くすること、ボールを柔らかくすること／バットを用いないことは互いに影響しあってゲームを成立させている。従来の野球・ソフトボールでは、投手はフィールドの中で唯一、主体的にボールを操作できるポジションであるという点で、特殊な技術を必要とするポジションである。つまり、専門的な技術練習が必要なポジションであると言える。また、投手の専門技術が向上すればする程に、打者に求められる打撃動作の技術もより難しいものとなる。この点から、「投手」の存在はベースボール型競技の「独自性」を強調し「興奮の探求」を引き立てる一つの側面であると同時に、投手、打者ともに専門的な技術練習を積む必要が「苦労や手間」を楽しむレベルではなく、「不満足やストレス」となり、参与への「障壁」となっていると考えられる。

このように、アーバンスポーツとして設計された Baseball 5 は、ベースボー

ル型とアーバンスポーツの「興奮の探求」を同時に持ち合わせている。ベースボール型における「投手」を存在させずに打撃の「興奮の探求」にフォーカスしたことは、非常に大胆な判断であったと考えられる。だが、WBSC 会長のリカルド・フラッカリが言うように、「手軽に街中で楽しめるこの競技が広がれば、これまで開拓できなかった地域や場所にも野球とソフトボールを広めることができる¹⁹⁾」という狙いを踏まえると、特殊な技術が必要なポジションや用具は1つでも少ない方が、参与への間口を広く取ることにつながるとみなせよう。

おわりに

今回取り上げた「Baseball 5」は、ベースボール型競技を恒久的にオリンピック公式種目につなぎとめておくために「スポーツの都市化」という概念に与することで、「アーバンスポーツ化」されたベースボール競技である。これは、バットやグローブという用具を削り、必要な技術も簡易化することでベースボール型競技の欧州やアフリカでの普及というミッションを担うことになった。そして Baseball 5 は 2026 ダカールユース大会で採用されることとなった。だがその結果、ベースボール型に独特の技術や「興奮の探求」を削いでしまっている。IOC は「スポーツの都市化」、「アーバンスポーツ」を提起した際に、今回紹介した「Baseball 5」のような競技の登場は想定していたのだろうか。こうした点から、今回検討した、スポーツの都市化と近代スポーツの関係、近代スポーツがオリンピックとの関係を構築する中でアーバンスポーツ化されていくような事例は、ライフスタイルスポーツをベースにアーバンスポーツを議論している先行研究に対して、近代スポーツ、アーバンスポーツをスポーツ文化の連続／断絶としてスポーツの近代から現代への変容について検討する必要性を投げかけるものと位置づくのでないだろうか。

事例としての「Baseball 5」は、今回挙げた以外にも様々な論点を持っている。1つは、「スポーツの都市化」を実行するために、アーバンスポーツの種目として「取り込み」を図っているライフスタイルスポーツの「エートス」との関係である。ライフスタイルスポーツは「単なるスポーツというアクティビティではなく、当事者たちの政治的なコミットメントも含めたライフスタイル、つまり、「生き方」を表現するプラットフォーム」という側面も持つ（市井、2020a、p.79）。生き方を表現するためのスポーツが行われる場として、現在のオリンピックはふさわしいのだろうか。オリンピックに取り込まれるにつれて、パフォーマンスが「数量化」され、それを比較して勝敗を決めるといった「記録万能主義」が徹底されるといった、アレン・グットマン（Allen Guttman）が整理したような近代スポーツの論理に絡め取られてしまう。

もう1つ、より具体的な論点がある。日本では、Baseball 5がベースボール型競技のスターターゲームとして前面に出ていない。それは、日本のベースボール型競技を統括するいくつかのIFが、従来の野球・ソフトボールこそが正当なベースボール型競技であるとみなしているがために、その「入門編」に「軟式野球」や「ゴムソフトボール」を位置付けていることが理由である。

ここで、日本における Baseball 5 の位置を確認しておきたい。2026 ダカールユース大会に向けて開催される、「第1回 WBSC-ASIA Baseball5 アジアカップ」のための日本代表を選考するためのプロセスにそのヒントがある。「Baseball 5 日本代表デジタルチャレンジ」と銘打って行われている代表選考は、その名前の通りインターネットによりプレー動画を集めて一次選考を行うことになっている。参加のためには、次のような条件が課されている²⁰⁾。

①日本国籍で、有効な日本国パスポートを所有していること。

②年齢

ユースの部：誕生日が2002年の1月1日～2005年の12月31日の間であること

オープンカテゴリーの部：18歳以上、誕生日が2001年12月31日以前であること

③応募と経歴

ユースの部に応募する場合、男子4名・女子4名の8名1チームで応募すること。

オープンカテゴリーの部は、以下のいずれかの形で応募することができる。

男性4名女性4名の8名1チーム、男性4名、女性4名

ユースのカテゴリー、オープンカテゴリーの1.～3.において応募する際、応募者の半数以上が、これまで全日本野球協会の加盟団体もしくは日本ソフトボール協会に属する団体に選手登録している、もしくはしていた者とする。

④その他

日本代表選手にふさわしい、スポーツマンシップを理解し、優れた技術及び人間性を持ち、なおかつ短期間のチーム活動においても自分自身の力量を発揮しながら、チームに貢献できる選手であること。

上に示したうちの「③応募と経歴」で強調した、「これまで全日本野球協会の加盟団体もしくは日本ソフトボール協会に属する団体に選手登録している、もしくはしていた者」という部分が肝要になる。つまり、今までに下の表のプロ以外で何かに所属しているチームに登録されたことがあるか、今現在登録されている必要があるということである。

ここから、Baseball 5の代表選考についてはプレイヤーを野球・ソフトボー

ル経験者から募ることにより、日本におけるベースボール型競技の力学の中に収められていることがわかる。

表 1 各競技の統括団体（年代別）²¹⁾

		小学校	中学校	高等学校	専門学校	大学	実業団	クラブチーム	プロ	
野球	硬式	ボーイズ リトルシニア ヤング ブロンコ	ボーイズ リトルシニア ポニー コルト フレッシュ	高野連	日本 野球 連盟	全日本 大学 野球 連盟	日本 野球 連盟	日本 野球 連盟	NPB	
									日本独立 リーグ 野球機構	
	軟式	全日本軟式野球連盟			全日本軟式野球連盟			なし		
ソフトボール		軟式			硬式			混在	なし	
		日本ソフトボール協会								

しかし、「軟式野球」や「ゴムソフトボール」は世界的には認知されていない。むしろ、本稿で議論したようなオリンピックとユースオリンピックの関係、アーバンスポーツと Baseball 5 の関係を考えると、従来の野球、ソフトボールは東アジアの国々とアメリカとその周辺の国々のみでプレーされ、その他の国々のベースボール型競技は Baseball 5 に置き換えられてしまうような逆転現象も起きうるのではないだろうか。

Palmer と Larson (2014) は、現在のオリンピックが「誤った美的目的やアイデンティティの上に成り立っている過剰な商業的利益に依存しているのではないか」という方向性について触れ、それにより「オリンピックが陳腐なものになる」ことへの懸念を示した。今後、延期された 2020 東京大会において、アーバンスポーツは IOC が狙った形で結果が出るのか否か、2026 ダカールユース大会において Baseball 5 が無形のレガシーを残してベースボール型をアフリカ大陸へ広める足掛かりとなるのか否か、この点の検証が求められる。それにより、オリンピックを陳腐にしてしまう可能性のある

「アーバンスポーツ」とライフスタイルスポーツの「エートス」との関係に
対し、近代スポーツのアーバンスポーツ化という視点から迫ることができる
のではないだろうか。

註

- 1) 本論文の着想は、立命館大学人文科学研究所の2019年度若手研究者研究支援プロジェクトの支援を受けて行った調査にある。執筆にあたっては、公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ研究助成による助成を受けている。
- 2) 朝日新聞デジタル『夏季五輪、24年パリ・28年ロス正式決定 IOC総会』2017年9月14日、<https://www.asahi.com/articles/ASK9F653BK9FUTQP023.html>（最終閲覧日 2020/07/22）
- 3) 2004年に開催されたアテネ大会では、開催地選定の過程で11の都市が立候補していた。しかし、2024年の開催地選定にあたっては、パリとロサンゼルスのみが立候補するにとどまっていた。この間に、4回のオリンピックが開催されたが、その立候補都市数も11から徐々に減少傾向にあった。このことの背景には、財政的な問題、環境的な問題がある。こういった問題に対して、当初の計画を上回る出費や環境への悪影響が及ぶことや、そもそも住民の合意を取り付けることの難しさが含まれている。BBC news JAPAN『なぜオリンピック招致から撤退する都市が相次いでいるのか』<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-46257994>（最終閲覧日 2020/09/11）
- 4) その他の大会も、西暦・開催地のルールに則って表記する。
- 5) 朝日新聞『五輪、日程・会場変えず 来夏、組織委発表』2020年07月18日、東京版朝刊1面
- 6) International Olympic Committee『NEW FRONTIERS: URBANISATION OF SPORTS』<https://www.olympic.org/olympism-in-action/new-frontiers-urbanisation-of-sports>（最終閲覧日 2020/08/27）
- 7) 日本オリンピック委員会『OLYMPIC AGENDA 2020 20+20 RECOMMENDATIONS』https://www.joc.or.jp/olympism/agenda2020/pdf/agenda2020_en_20160201.pdf、p.10、（最終閲覧日 2020/08/25）
- 8) World Baseball Softball Committee『DEVELOPMENT COMMISSION REPORT 2018/2019』<https://s3-eu-west-1.amazonaws.com/static.wbssc.org/assets/cms/documents/dff2edf8-5101-5d28-8263-2d75cb2c7967.pdf>（最終閲覧日 2020/07/22）
- 9) このほかにも、独立行政法人国際協力機構（JICA）によるものがある。そこでは、青年海外協力隊の一環としての「発展途上国」への指導者派遣や、JICAと大学が連携し、日本の大学チームが現地へ赴いてプレーを共に行うといったことが行われている。

る。

- 10) World Baseball Softball Committee『Baseball 5』<https://baseball5.wbsc.org/>（最終閲覧日 2020/07/22）
- 11) 2020/09/16 現在、YouTube で「street baseball」と検索すると、上位に「The Cuban version of baseball - Red Bull 4Skins (<https://youtu.be/AYRh-Bd1ohA>)」という動画が出る。細かいルールの違いは見受けられるものの、ほぼ Baseball 5 の原型をなしている。この Red bull が行った「4Skins（クアトロ・エスキナス）」に関する調査と検討は今後の課題となる。キューバで行われているストリートベースボールの日常風景は、「Street Baseball (<https://youtu.be/euuKgcI-1-0>)」や「Cuatro Esquinas - street baseball in Cuba (<https://youtu.be/s1k6Cvwg5sU>)」が参考になるだろう。（全ての最終閲覧日 2020/09/16）
- 12) 波戸健一、2020 年 8 月 7 日、『フランス生まれ、手でボールを打つ野球「ベースボール 5」ユース五輪にも採用』、朝日新聞 GLOBE+, <https://globe.asahi.com/article/13612090>、（最終閲覧日 2020/08/31）
- 13) World Baseball Softball Committee『Baseball 5 Rules』<https://static.wbsc.org/wp-content/uploads/baseball5-rules-eng.pdf>（最終閲覧日 2020/08/27）強調は引用者による。
- 14) World Baseball Softball Committee『Zimbabwe growing the game in country & Africa with young urban Baseball5 discipline』<https://www.wbsc.org/news/zimbabwe-growing-the-game-in-country-africa-with-young-urban-baseball5-discipline>（最終閲覧日 2020/07/22）
- 15) World Baseball Softball Committee『Baseball 5 Rules』<https://static.wbsc.org/wp-content/uploads/baseball5-rules-eng.pdf>（最終閲覧日 2020/08/27）
- 16) World Baseball Softball Committee『2019: Baseball5 - continues to spread like "wildfire"』<https://www.wbsc.org/news/2019-in-review-baseball5-another-year-of-exceptional-growth>（最終閲覧日 2020/07/22）
- 17) World Baseball Softball Committee『Baseball5 added to Youth Olympic Games Dakar 2022 sports programme』<https://www.wbsc.org/news/baseball5-added-to-dakar-2022-sports-programme>、（最終閲覧日 2020/08/31）
- 18) World Baseball Softball Committee『Baseball5 added to Youth Olympic Games Dakar 2022 sports programme』<https://www.wbsc.org/news/baseball5-added-to-dakar-2022-sports-programme>（最終閲覧日 2020/07/22）、原文は 2026 年への延期が反映されていないかったが、延期されたことを確認した上で、2026 年と訳した。
- 19) World Baseball Softball Committee『Baseball 5』<https://baseball5.wbsc.org/>（最終閲覧日 2020/07/22）
- 20) 全日本野球協会、『Baseball 5 日本代表デジタルチャレンジ』<https://baseball5.jp> より抜粋（最終閲覧日 2020/09/20）強調は引用者による。
- 21) 全日本野球協会、『Baseball 5 日本代表デジタルチャレンジ』<https://baseball5.jp> 内の図

1 より筆者作成（最終閲覧日 2020/09/20）

参考文献

- 市井吉興、2020a、「『創造的復興』と延期された 2020 東京オリンピック——例外状態・ニュー・ノーマル・ライフスタイルスポーツ」、『大原社会問題研究所雑誌』、742、法政大学大原社会問題研究所
- 市井吉興、2020b、「『ニュースポーツ』とスポーツツーリズム—スポーツツーリズムの資源としての『ニュースポーツ』の可能性とは？」、『観光学評論』、8（1）、観光学術学会
- 市井吉興、2019、「『アーバンスポーツ』と二〇二〇東京オリンピック——国際オリンピック委員会が期待する『スポーツの都市化』とは何か？」、『唯物論研究年誌』、24、唯物論研究協会
- Wheaton, Belinda、2014、*The Cultural Politics of Lifestyle Sports*、Routledge、London（＝ベリンダ・ウィートン著、市井吉興、松島剛史、杉浦愛監訳、2019、『サーフィン・スケートボード・パルクール ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版）
- Elias, Norbert and Dunning, Eric、1986、*Quest for Excitement: Sport and Leisure in the Civilizing Process*、Blackwell、Oxford（＝ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング著、大平章訳、1995、『スポーツと文明化—興奮の探求』法政大学出版局）
- 貝島桃代、2000、「トーキョー・建築・ライナーノーツ :3 アーバンスポーツ」、『10+1』、20、INAX
- 菊幸一、2010、「暴力の抑制 エリアス／ダニング『スポーツと文明化』」、井上俊ほか編『社会学ベーシック 8 身体・セクシュアリティ・スポーツ』世界思想社、pp.219-228
- Guttmann, Allen、1978、*From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*、Columbia University Press、New York（＝清水哲男訳、1981、『スポーツと現代アメリカ』TBSブリタニカ）
- 菅原礼、1984、「第1部 スポーツ技術」菅原礼編『スポーツ技術の社会学』不昧堂出版、pp.9-54
- 豊島誠也、田里千代、2019、「都市空間で波に乗る—アーバンスポーツとしてのサーフィンの可能性と課題」、『体育の科学』、69（8）、日本体育学会
- 橋本純一、1984、「第2部 スポーツ技術の構成」菅原礼編『スポーツ技術の社会学』不昧堂出版、pp.55-130
- Palmer, Clive and Larson J. Mitchell、2015、「When (or how) do the Olympics become 'stale'?」、*Sport in Society*、18（3）、Routledge、London
- 三谷舜、2018、「スポータイゼーション再考に向けて：エリアス・ダニング・マクワイヤの議論を参考に」、『現代スポーツ研究』、2、新日本スポーツ連盟附属スポーツ科学研究研究所